

ふたぎに、きゝ、いるべくもあらぬ物をとて、御袖して御み、ふたぎ給つ、

〔太平記三〕主上御没落笠置事

同年十月元弘元 十三日ニ、新帝光嚴 登極ノ由ニテ、長講堂ヨリ内裏へ入セ給フ、供奉ノ諸卿、花ヲ打テ

行装ヲ引刷ヒ、隨兵ノ武士甲冑ヲ帶シテ非常ヲ誠ム、イツシカ前帝奉公ノ方様ニハ、咎有モ咎無

モ、如何ナル憂目ヲカ見ズラント、事ニ觸テ身ヲ危ミ心ヲ碎ケバ、當今拜趨ノ人々ハ、有忠モ無

忠モ、今ニ榮花ヲ開キスト、目ヲ悦バシメ、耳ヲコヤス、子結ンデ陰ヲ成シ、花落テ枝ヲ辭ス、窮達時

ヲ替、榮辱道ヲ分ツ、今ニ始メヌ憂世ナレドモ、殊更夢ト幻トヲ、分兼タリシハ此時也、

〔太平記十九〕青野原軍事附囊沙背水事

坂東ヨリノ後攻ノ勢、美濃國ニ著テ評定シケルハ、略 御方ノ勢、勞兵ノ弊ニ乗テ國司ノ勢ヲ前

後ヨリ攻ンニ、勝事ヲ立ロニ得ツベシト申合レケルヲ、土岐頼遠默然トシテ耳ヲ傾ケ、ルガ下

略

〔兼葭堂雜錄三〕安永七年戊の春、豊後國の産なりとて、耳四郎といへる者を觀物に出せり、其藝と

いふは、耳にて物を言を一奇とす、先始め耳より聲を出し、或は大文字屋の歌を諷ひ、大聲を出せ

ば、竹細工の象獨樂のごとく聞へ、夫より種々歌を諷ひ、三絃に合せ、見物を嬉ばしむ、若や口の中

に笛など仕掛あらんとの見客の疑ひを晴さんため、田葉粉を吸ヒ、聲を出せり、實に稀代の奇藝

なりとて、大に繁昌せり、耳は聲を聽を主る者なるに、耳を以て言語を發すること、其類なること

を未聞す、

〔新著聞集七〕強力く擔ひ耳力得金

森四郎左衛門と云るは、勢州一身田の者なりしが、江戸にて鎌田又八と同所に居けり、ある時四

郎左衛門がいはい、その方いかに強力なり共、自が耳には及ぶまじとあれば、これぞゆゑ、しき力